

令和6年 3月28日	農作物病虫害発生予報 4月	山口県病虫害防除所 山口県農林総合技術センター
---------------	--------------------------------	----------------------------

～目次～

I 予報の概要	1
II 予報	
【主要病虫害】	2
【その他の病虫害】	12
III 参考(予報の見方、気象予報)	13

I 予報の概要

作物名	病虫害名	予想発生量	現況	
			平年比	前年比
カンキツ	かいよう病	少	少	少
	そうか病	多	多	多
ナシ	黒斑病	やや少	やや少	前年並
果樹全般 (モモ、ウメ)	カメムシ類	多	多	多
タマネギ	べと病	やや多	やや多	前年並
	白色疫病	やや多	やや多	多
イチゴ	うどんこ病	平年並	平年並	少
	アブラムシ類	多	多	多
	ハダニ類	やや少	やや少	多
	アザミウマ類	平年並	平年並	少

お問い合わせ先
山口県農林総合技術センター(山口県病虫害防除所)
TEL (0835)28-1211 (代)
FAX (0835)38-4115
E-mail a172011@pref.yamaguchi.lg.jp

II 予報

【主要病害虫】

カンキツ

1 かいよう病

(1) 予報内容

予想発生量	現 況		防除時期
	平年比	前年比	
少	少	少	開花前

(2) 予報の根拠

ア 3月下旬の巡回調査では、発生ほ場率5.3%（平年14.6%）、発病葉率0.1%（平年0.9%）、発病度0.0（平年0.2）、発病葉枝率0.1%（平年1.3%）で平年に比べ少なかった（-）。

イ 気象予報では、4月の降水量は多い（+）。

(3) 防除対策

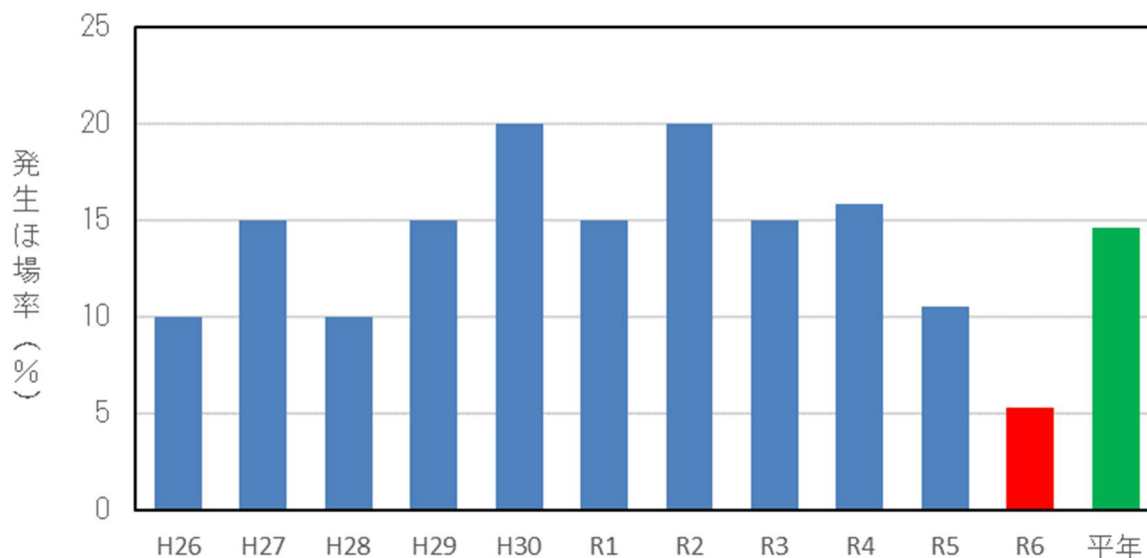
<耕種的防除>

ア 伝染源となる夏秋梢等の不要な枝を除去する。

イ 防風樹や防風ネットを整備し、強風による枝葉の損傷を防ぐ。

<防除のポイント>

かいよう病にかかりやすい品種（南津海、甘夏、伊予柑等）や越冬病斑が認められる園では、発芽前に無機銅剤（I Cボルドー66D、コサイド3000、Zボルドー等）を必ず散布する。



カンキツかいよう病の発生ほ場率 (3月中旬、越冬病斑調査)

2 そうか病

(1) 予報内容

予想発生量	現 況		防除時期
	平年比	前年比	
多	多	多	発芽始め

(2) 予報の根拠

ア 3月下旬の巡回調査では、発生ほ場率15.8%（平年3.6%）、発病葉率0.4%（平年0.1%）で平年に比べ多かった（+）。

イ 気象予報では、4月の降水量は多い（+）。

(3) 防除対策

<耕種的防除>

伝染源となる病斑のある葉や枝を除去する。

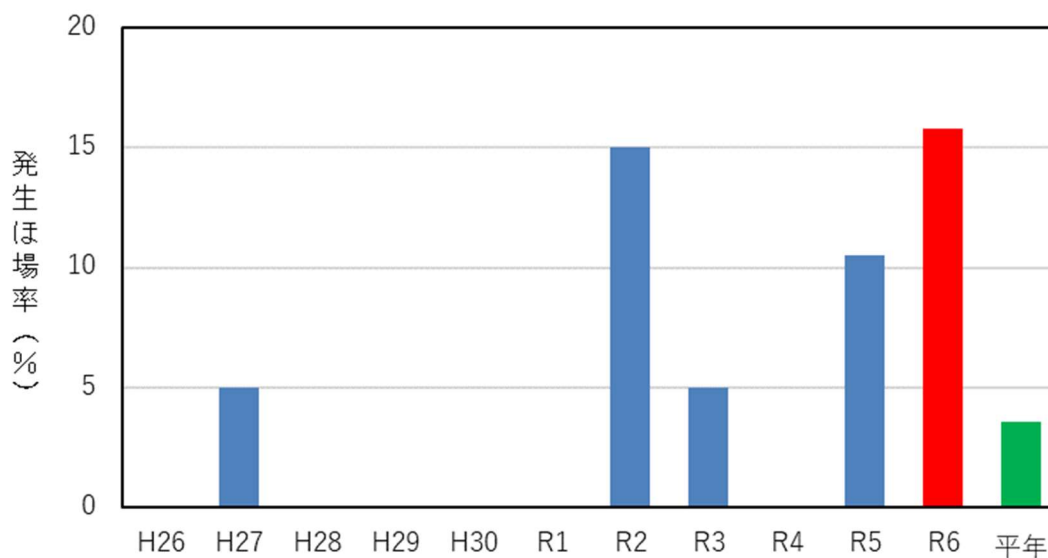
<防除のポイント>

ア 病斑が認められるほ場では、必ず薬剤防除を実施する。

イ 薬剤防除は新梢が1cmの頃に行うと効果が高い。

ウ 一部のほ場では、トップジンM剤、ベンレート剤（殺菌剤コード1）等の耐性菌が発生しているため、本剤を使用しても効果が認められない場合は、使用を中止し、ストロビー剤（殺菌剤コード11）、フロンサイド剤（殺菌剤コード29）、デラン剤（殺菌剤コードM9）等を使用する。

エ 減農薬栽培ほ場では、多発することがあるので、発生状況をよく確認する。



カンキツそうか病の発生ほ場率 (3月下旬、越冬病斑調査)

1 黒斑病

(1) 予報内容

予想発生量	現 況		防除時期
	平年比	前年比	
やや少	やや少	前年並	<ul style="list-style-type: none"> ・りんぼう脱落期 ・開花直前 ・3分咲頃 ・人工交配終了後 ・落花後

(2) 予報の根拠

ア 3月下旬の巡回調査では、発生ほ場率11.1%(平年27.2%)、発病枝率0%(平年0.3%)、発病芽率0.0%(平年0.1%)で平年に比べやや少なかった(-)。

イ 気象予報では4月の気温は高い、降水量は多い(+)

(3) 防除対策

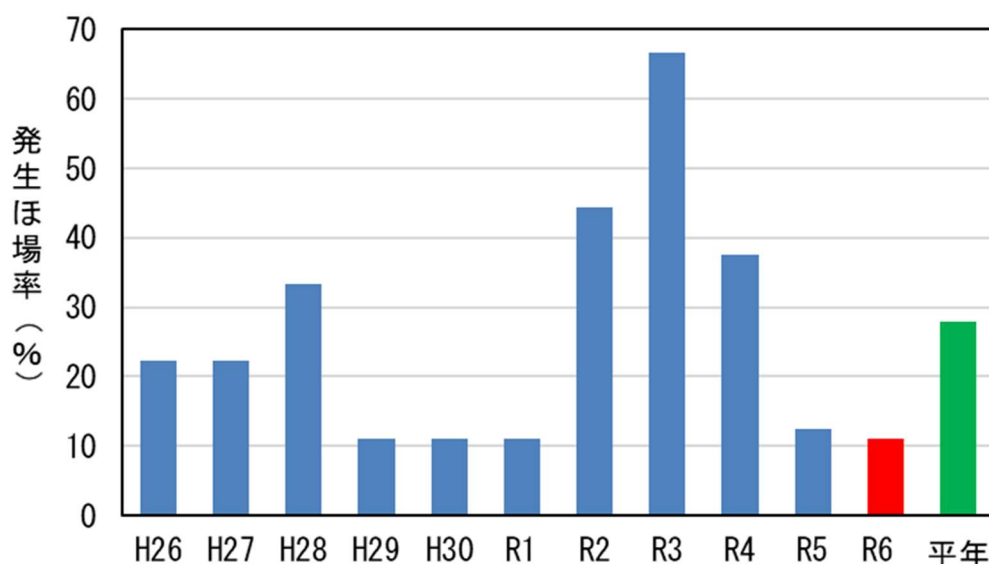
<耕種的防除等>

萌芽期から開花までに、伝染源となる枝病斑の封じ込めと病芽の切り取りを徹底し、伝染源を減らす。

<防除のポイント>

ア 開花期から小袋掛けの終わる4月中旬から5月中旬までが特に重要な薬剤防除時期である。

イ 耐性菌の出現を回避するため、同一系統の薬剤を連用しない。なお、県内全域でポリオキシシン剤(殺菌剤コード19)の耐性菌が発生しているため、銅剤と混用する。



ナシ黒斑病の発生ほ場率 (3月下旬)

果樹全般（ウメ、モモ、ビワ等）

1 カメムシ類（チャバネアオカメムシ、ツヤアオカメムシ、クサギカメムシ）

(1) 予報内容

予想発生量	現 況		防除時期
	平年比	前年比	
多	多	多	園内への飛来確認時

(2) 予報の根拠

ア クサギカメムシの隙間トラップによる越冬量調査(10か所)では、1トラップ当たり96.4頭(平年23.3頭)で平年に比べ多かった(+)。

イ 果樹カメムシ類の越冬量と相関の高い前年のスギ、ヒノキの花粉飛散量は平年に比べ多かった(+)。

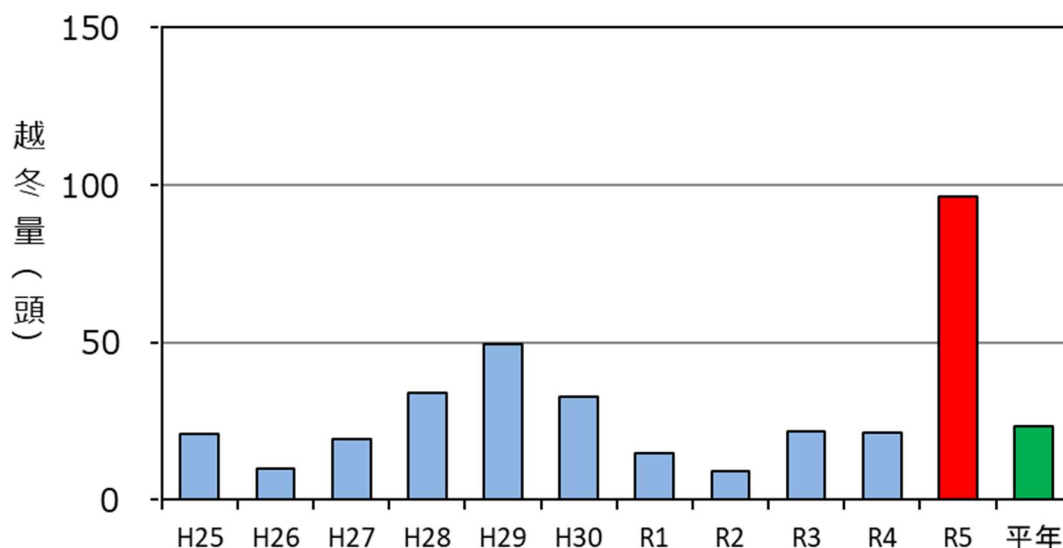
(3) 防除対策

<耕種的防除等>

常発園では、ネット（網目4mm以下）で園全体を覆い侵入を防ぐ。

<防除判断>

ウメ、モモ、ビワ等で被害を受けることの多い園では、気温の高い日に園内を観察し、飛来を確認したら防除する。



ベニヤ板すき間トラップによるクサギカメムシの越冬量（10か所平均）

1 ベと病

令和6年2月29日付け令和5年度農作物病害虫発生予察注意報第6号参照
<https://www.pref.yamaguchi.lg.jp/uploaded/attachment/173257.pdf>

(1) 予報内容

予想発生量	現 況		防除時期
	平年比	前年比	
やや多	やや多	前年並	発生前～発病初期

(2) 予報の根拠

- ア 3月下旬の巡回調査では、発生ほ場率0%(平年6.5%)、発病株率0%(平年0.5%)、1a当たり調査では、越年り病株(一次感染株)の発生ほ場率17.9%(平年13.6%)、発病株数0.4(平年0.8)で平年に比べやや多かった(+)
- イ 気象予報では、4月の気温は高い、降水量は多い(+)

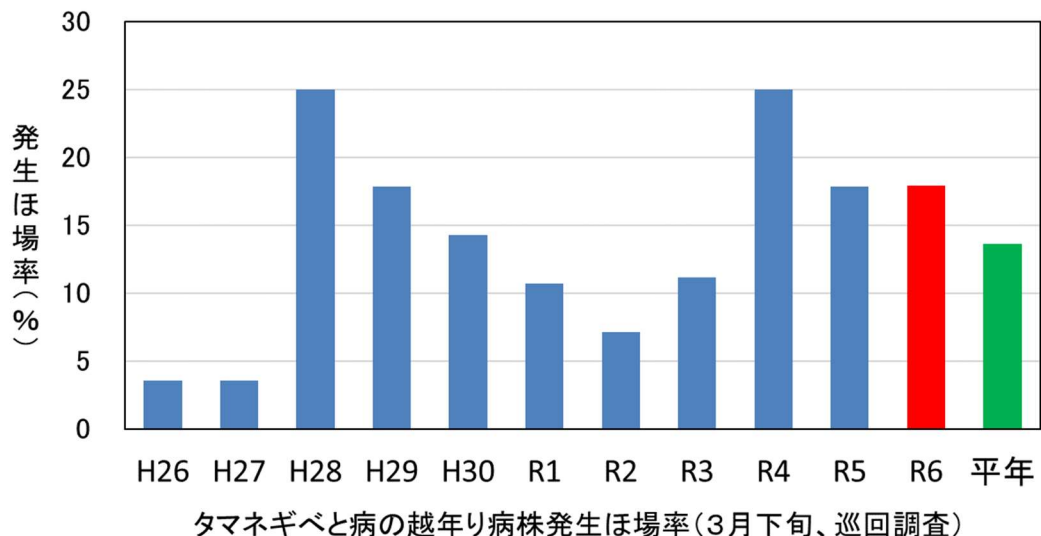
(3) 防除対策

<耕種的防除等>

- ア ほ場をよく観察し、越年り病株(一次感染株)を見つけた場合は、直ちに抜き取り、ポリ袋等に密封してほ場外に持ち出し、焼却や土中に埋めるなど適正に処分する。
- イ ほ場の排水を良好にする。

<防除のポイント>

- ア ジマンダイセン剤(殺菌剤コードM3)、フロンサイド剤(殺菌剤コード29)等の保護殺菌剤で、定期的な予防防除を実施する。
 - イ 越年り病株の抜き取り処分後は、治療効果のある薬剤(殺菌剤コード4、11、40を含む薬剤)等で直ちに防除を行う。
 - ウ 薬剤耐性を発達させないため、同一系統の薬剤の連用は避ける。
- ※ 本病に登録のある薬剤は混合剤が多いことから、一般名の成分及び殺菌剤コードをよく確認し、使用回数に注意する。



2 白色疫病

(1) 予報内容

予想発生量	現 況		防除時期
	平年比	前年比	
やや多	やや多	多	発病初期

(2) 予報の根拠

ア 3月下旬の巡回調査では、発生ほ場率7.1%（平年4.6%）、発病株率3.4%（平年0.4%）、1a当たり調査では、発生ほ場率10.7%（平年10.7%）、発病株数22.9（平年4.0）で平年に比べやや多かった（+）。

イ 気象予報では、4月の降水量は多い（+）。

(3) 防除対策

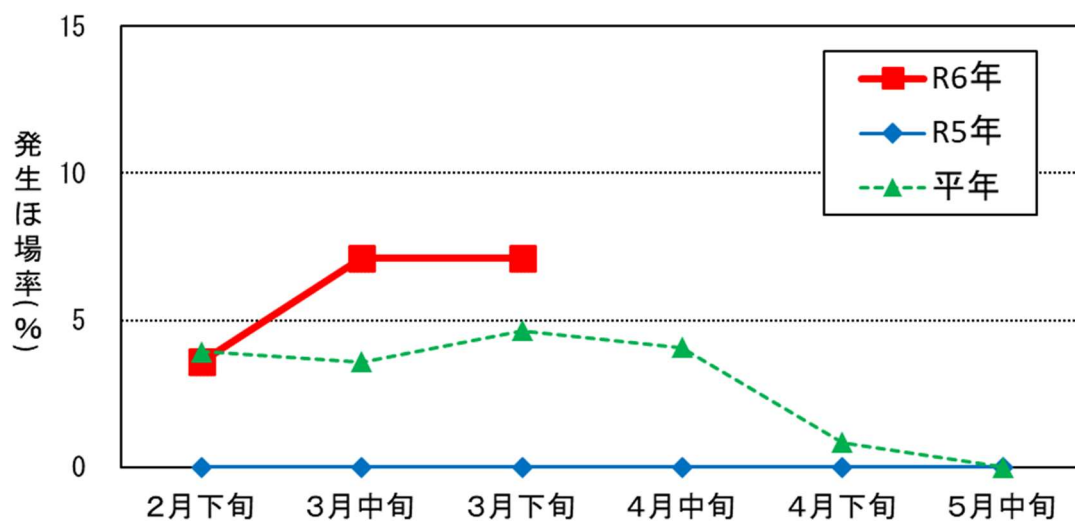
<耕種的防除等>

ほ場の排水を良好にする。

<防除のポイント>

ア ほ場の見回りを行い、発生を確認した場合は、治療効果がある薬剤（殺菌剤コード4、40、43を含む薬剤）で直ちに防除を行う。

イ 薬剤散布後は防除効果を確認し、その後も発生が認められる場合は、系統の異なる薬剤で追加防除を行う。



タマネギ白色疫病の発生推移

イチゴ

1 うどんこ病

(1) 予報内容

予想発生量	現 況		防除時期
	平年比	前年比	
平年並	平年並	少	発病前または発病初期

(2) 予報の根拠

ア 3月下旬の巡回調査では、発生ほ場率5.0%（平年7.6%）、発病株率0.1%（平年1.0%）、発病葉率0.1%（平年0.2%）、発病果率0.0%（平年0.1%）で平年並みであった（±）。

(3) 防除対策

<耕種的防除等>

被害果や被害茎葉は伝染源となるので、施設外に持ち出し適正に処分する。

<防除のポイント>

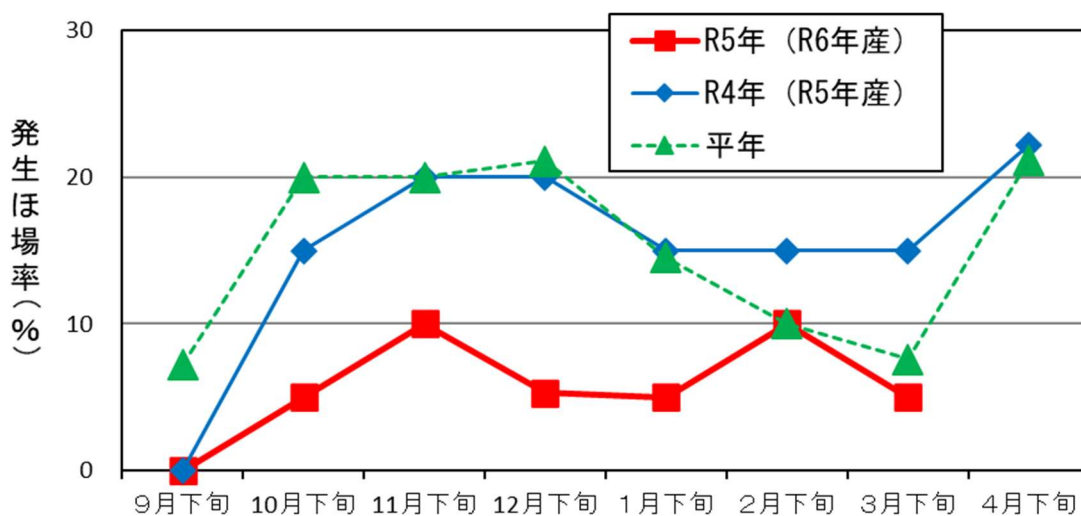
ア 本病は、発病初期には葉裏に発生しやすいため、葉裏をよく確認し、早期発見に努める。

イ 予防防除と発病初期の防除に重点をおき、薬液が葉裏や新芽にも十分かかるよう、古葉を除去して丁寧に散布する。

ウ 薬剤散布後は防除効果を確認し、その後も発生が認められる場合は、約7日おきに1～2回薬剤を追加散布する。

エ トリフミン剤（殺菌剤コード3）、アミスター剤（殺菌剤コード11）は耐性菌が出現しているため、防除効果が劣る場合は他の薬剤を使用する。

オ 薬剤耐性を発達させないため、同一系統薬剤の連用は避ける。



イチゴうどんこ病の発生推移

2 アブラムシ類

令和6年2月1日付け令和5年度農作物病虫害発生予察技術資料第2号参照

<https://www.pref.yamaguchi.lg.jp/uploaded/attachment/171123.pdf>

(1) 予報内容

予想発生量	現 況		防除時期
	平年比	前年比	
多	多	多	発生初期

(2) 予報の根拠

ア 3月下旬の巡回調査では、発生ほ場率30.0%(平年19.3%)、寄生株率6.0%(平年1.5%)で平年に比べ多かった(+)。

イ 気象予報では、4月の気温は高い(+)

(3) 防除対策

<耕種的防除等>

下葉の葉かきをこまめに行う。

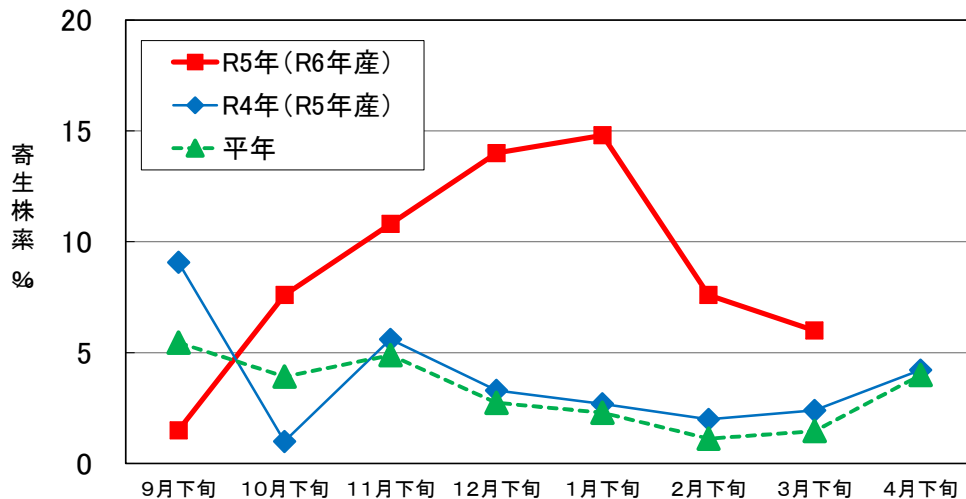
<防除のポイント>

ア 薬剤散布時は、葉裏、花房や新芽等までムラなくかかるよう十分な量の薬液を散布する。

イ 薬剤抵抗性を発達させないため、同一系統の薬剤の連用は避ける。

ウ 薬剤散布を行う場合は、ミツバチに影響の少ない薬剤を使用する。

(<https://www.pref.yamaguchi.lg.jp/uploaded/attachment/123673.pdf>)



イチゴ アブラムシ類の発生推移

3 ハダニ類

(1) 予報内容

予想発生量	現 況		防除時期
	平年比	前年比	
やや少	やや少	多	発生初期

(2) 予報の根拠

ア 3月下旬の巡回調査では、発生ほ場率25.0%(平年40.6%)、寄生株率5.2%(平年14.4%)で平年に比べやや少なかった(－)。

イ 気象予報では、4月の気温は高い(+)

(3) 防除対策

<耕種的防除等>

下葉の葉かきをこまめに行う。

<防除のポイント>

ア 薬剤防除の前には、薬剤が葉裏まで十分かかるように下葉を除去する。また、除去した下葉は、ほ場外に持ち出し適正に処分する。

イ 気門封鎖剤を使用する場合は、その多くがハダニ類の卵には効果が低く、残効性がないため、7～10日間隔で散布する。

ウ 薬剤抵抗性を発達させないため、同一系統の薬剤の連用は避ける。化学農薬に対する抵抗性が発達しているため、散布後に効果を確認し、十分な効果が認められない場合は、気門封鎖剤を中心に防除を行う。

エ 天敵(ミヤコカブリダニ等)を放飼している場合は次のことに注意して使用する。

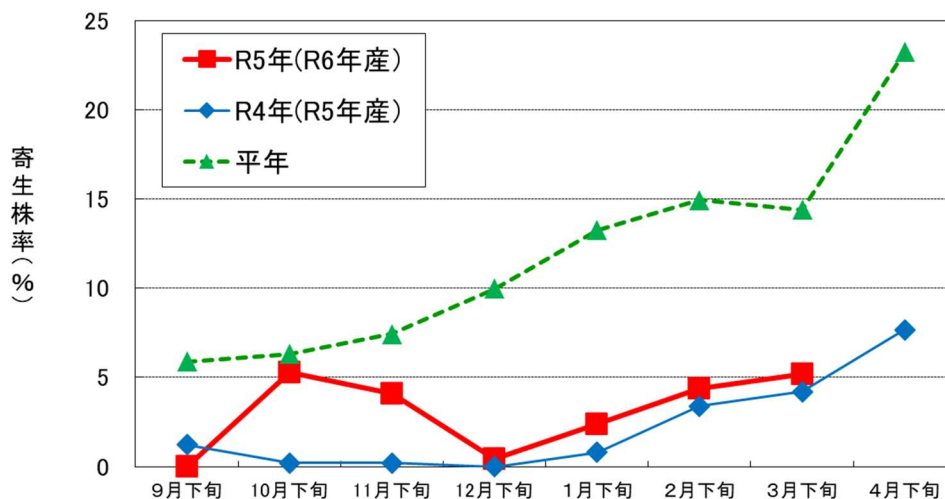
(ア) 天敵に影響の少ない薬剤(スターマイト剤、ダニオーテ剤、ダニコング剤、ダニサラバ剤、マイトコーネ剤等)を使用する。

(イ) 硫黄のくん煙は1日2時間程度とする。

※ 放飼方法、放飼後の管理についてはメーカーホームページを参照

オ 薬剤散布を行う場合は、ミツバチに影響の少ない薬剤を使用する。

(<https://www.pref.yamaguchi.lg.jp/uploaded/attachment/123673.pdf>)



イチゴ ハダニ類の発生推移

4 アザミウマ類

(1) 予報内容

予想発生量	現 況		防除時期
	平年比	前年比	
平年並	平年並	少	発生初期

(2) 予報の根拠

ア 3月下旬の巡回調査では、発生ほ場率45.0%(平年38.2%)、寄生花率2.8%(平年4.3%)で平年並みであった(±)。

イ 気象予報では、4月の気温は高い(+)

(3) 防除対策

<防除判断>

こまめにはほ場を見回り、ルーペ等を用いるなどして本虫の発生状況をよく観察する。花に息を吹きかけると本虫が動き、確認しやすくなる。発生が認められた場合には、直ちに薬剤を散布する。

<防除のポイント>

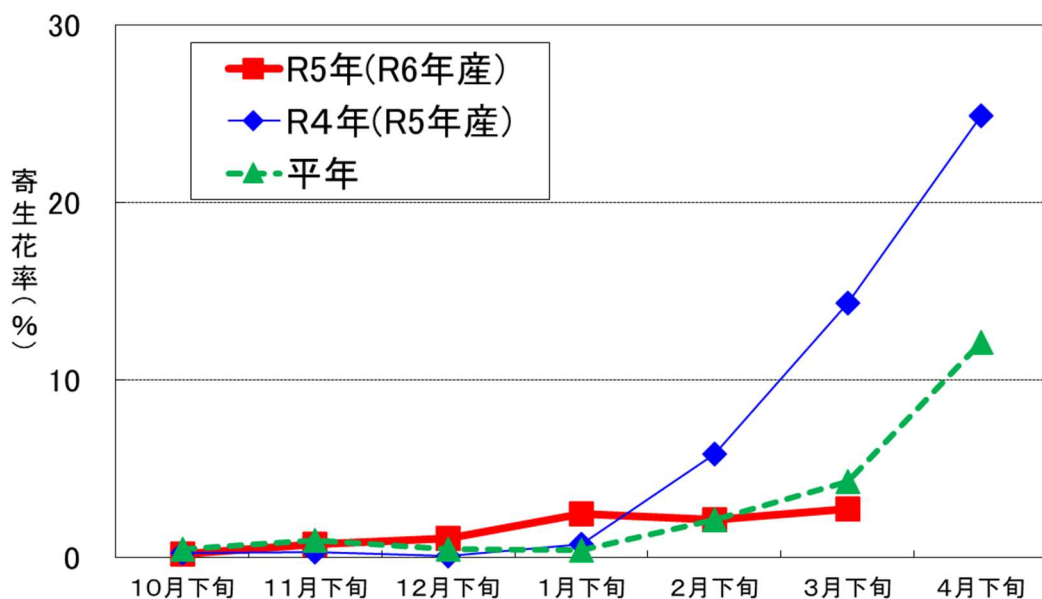
ア 多発生(寄生花率10%以上)の場合には、他系統の薬剤を用いて複数回防除を行う。薬剤散布後には必ず防除効果を確認する。

イ 薬剤抵抗性を発達させないために薬剤コードを考慮し、同一系統薬剤の連用は避ける。

ウ 薬剤散布を行う場合は、ミツバチへの安全日数を考慮する。

(<https://www.pref.yamaguchi.lg.jp/uploaded/attachment/123673.pdf>)

エ 天敵を放飼している場合には、天敵に影響の少ない剤を選択する。ただし、アザミウマ類の発生が多い場合には、本虫の防除を優先する。



イチゴ アザミウマ類の発生推移

【その他の病害虫】

作物名	病害虫名	予 想 発生量	現 況		発生ほ場率		備 考
			平年比	前年比	本年 (%)	平年 (%)	
タマネギ	腐敗病	やや多	やや多	多	7.1	3.6	
	軟腐病	平年並	平年並	前年並	0	0	
	ボトリチス属菌 による葉枯症 (白斑葉枯病)	平年並	平年並	前年並	0	0.7	
イチゴ	コナジラミ類	やや少	やや少	前年並	10.0	29.0	

III 参考

1 予報の見方

(1) 病虫害発生量の基準（原則として過去10年間の発生量と比較）

ア 平年比

多	過去10年間で最も多かった年と同程度以上の発生
少	〃 で最も少なかった年と同程度以下の発生
やや多	〃 で2～3番目に多かった年と同程度の発生
やや少	〃 で2～3番目に少なかった年と同程度の発生
平年並	〃 で標準的にみられた発生（上記4項目を除くもの）

注：過去の発生量との比較を表わすもので、被害や防除の必要性とは異なる）

イ 前年比

多	平年比の5段階評価で区分し、前年の評価より多い発生
少	〃 前年の評価より少ない発生
前年並	〃 前年の評価と同等の発生（上記2項目を除くもの）

(2) 病虫害発生時期の基準（原則として過去10年間の発生時期と比較）

早 い	過去10年間の平均値より6日以上早い
遅 い	〃 より6日以上遅い
やや早い	〃 より3～5日早い
やや遅い	〃 より3～5日遅い
平年並	〃 を中心として前後2日以内

注：ウンカ類は1971年以降、コブノメイガは1985年以降の初確認日と比較（半旬毎）

(3) 予報根拠における発生要因の評価基準

+	発生を助長する要因
±	発生の助長及び抑制に影響の少ない要因
-	発生を抑制する要因

2 気象予報

(1) 概要

1 か月気象予報（3月21日福岡管区气象台発表）

予 報	低 い (%) 少 ない	平年並 (%)	高 い (%) 多 い
気 温	10	20	70
降 水 量	10	30	60
日照時間	50	30	20

週ごとの気温傾向

予 報	低 い (%)	平年並 (%)	高 い (%)
1 週 目	10	10	80
2 週 目	10	30	60
3～4 週 目	20	30	50